九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

清平山堂『六十家小説』をめぐって：『宝文堂書目』著録話本小説の再検討

中里見，敬
東北大学大学院：中国文学

https://hdl.handle.net/2324/6460

出版情報：東方學. 85, pp.100-115, 1993-01-31. 東方学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

東方學　第八十五輯

清平山堂『六十家小說』をめぐって

――『寶文堂書目』著錄話本小說の再檢討――

中里見　敬

はじめに

話本小說の研究は、來源の探索を中心に大きな成果が見られ、共通の物語內容が時代やジャンルを越えて樣々に受け繼がれ再生されることが明らかにされてきた(1)。しかし、こうした物語內容の起源と文學樣式としての話本小說の起源とが、ときに混同して論じられることがあるように思う。例えば、『醉翁談錄』に記錄された講談の題目からは、確かに現存の話本小說と共通の物語內容がすでに講唱文藝として語られていたことがわかる。だが、それが話本小說という典型的な表現樣式を備えたテクストとして定着されていたかどうかは、物語內容が成立していたこととは別の問題である。

本稿は、物語內容の成立と表現樣式としての話本小說の成立とを分けて考える立場から、『寶文堂書目』著錄の話本小說を再檢討することを課題とするものである。

一　『寶文堂書目』は宋元話本を著錄するという通說

宋代に白話で書かれた講談の臺本、すなわち話本があったという說は、確かな文獻的根據を缺くにもかかわらず、疑問を抱かれることは少なかった。例えば魯迅が、

○說話は、說話人がそれぞれ天分と機智にたよって、臨機應變に發揮したけれども、やはり、たよりとする臺本があった。それが、「話本」である(2)。

というとき、講談に關する歷史的記錄と、敦煌から唐末の變文が發見されたこと、および當時まだ眞僞を疑われていなかった『京本通俗小說』を念頭においていることは、前後の記述からみて明らかである。一方、增田涉氏は、「話本」とい

う語の當時の用法を分析した結果、それはあるテクストを指すのではなく、「故事」「說話」という意味であることを論證した(3)。それにもかかわらず、講釋の臺本、あるいは講釋を寫定したテクストとしての話本が、宋代から存在したという說は、今日廣く行われている。

『寶文堂書目』に著錄されている小說は、例えば譚正璧が次のように述べるように、宋元の話本を多く含むと見なされてきた。

○寶文堂書目の作者晁瑮は明嘉靖の時の人であり、時代から言って、著錄されたのは多くが宋元の舊本であるはずだ(4)。

さらに、宋代の話本そのものが傳わっていないという現實があるために、宋代話本の文獻上の記錄として、『寶文堂書目』の著錄はとりわけ重視されてきたのである。

こうした見方は、『寶文堂書目』著錄の中から、具體的にどれが宋元話本であるかを特定する孫楷第(5)や胡士瑩(6)の研究へと發展した。一方、譚正璧は時代特定には愼重な態度をとり、物語內容の考證を重視する立場から、現存するもの、現存しないが內容のわかるもの、存佚・內容ともわからないもの、に分類して、『寶文堂書目』から百十二種の話本を抽出した(7)。

さらには、清平山堂刊行の話本は、『寶文堂書目』に著錄された宋元話本をもとにして刊行されたと考える、胡士瑩の次のような說さえ現れるに至った。

○《清平山堂話本》の二十九篇のうち、《寶文堂書目》に著錄されたのは二十四篇の多きにのぼる。おそらく晁氏の所藏は、一部分洪氏によって刊行されたのであろう。晁目で篇名に「記」という字のない五篇は、洪氏の刊本ではすべて「記」字がある。これは洪氏が刊刻したときに加えたものに違いなく、晁氏の藏本が多く原本であったことを證明している(8)。

歷史記錄と書目によるこうした文獻學的操作は、一見きわめて客觀的であるように思われる。しかし、表現樣式への配慮を怠ったまま、單に物語內容の一致を根據として、宋代の講談を寫した話本が存在したはずだという固定觀念を滿足させる結論を導きやすいことも確かである。その結果、『醉翁談錄』の記錄と、『寶文堂書目』あるいは現存の話本小說とが一致すると、ただちにそれは宋代の講談を寫した話本だと結論されることになった。

しかし一方で、研究の初期には、『寶文堂書目』の著錄したものは清平山堂が刊行した話本であると考える論もあったことを想起する必要がある。馬廉と、それを承けた陳汝衡の說である。

○私はかつて大まかに考證してみて、洪氏と同時代の開州

の藏書家晁瑮の、寶文堂分類書目・子雜類の著錄するかなりの話本は、洪氏の刻本を收めたものだと感じた(9)。

○洪楩と晁瑮はともに明代中葉嘉靖間の藏書家であり、洪楩が本を刻するやいなや、晁瑮はただちに收藏したようである(10)。

しかし、前述のような研究の方向が定着するにつれて、この說は顧みられなくなった。近年ではわずかに黃永年氏の主張が見られるだけである。

○現在まで傳わる洪楩《清平山堂話本》は全部で二十九篇であり、晁瑮《寶文堂書目》子雜類に見えるものは二十一篇ある。もし晁瑮の所藏が洪楩以前の舊刻であるならば、篇目が洪楩の刻本とこれほどまで一致することはありえない。したがって晁瑮が所藏し著錄した小說話本は、《紅白蜘蛛記》を含めて、當時洪楩らによって新しく刻されたものであると推測される(11)。

以下の章では、目錄學的見地から馬廉らの說を再檢討する。

二　『寶文堂書目』著錄話本小說の再檢討

1　『寶文堂書目』の編者と年代

『四庫全書總目提要』は目錄類存目に『寶文堂分類書目三卷』を載せている。それによると、編者の晁瑮は、嘉靖二十年の進士。その子の東吳は、嘉靖三十二年の進士である。

このことは、『千頃堂書目』卷二十三嘉靖辛丑科（二十年）の、

○晁瑮鏡湖文集一卷（字缺、開州人、國子監司業）

および同じく卷二十三嘉靖癸丑科（三十二年）の、

○晁東吳遺文四卷（字叔泰、瑮子、直隸開州人、庶吉士）

という記載からも確認できる(12)。

一方、『明代版刻綜錄』に採られた晁瑮寶文堂刊行の四種の刊本は、嘉靖二十五年から嘉靖三十三年の間に出ている(13)。こうした事情から判斷して、『寶文堂書目』には嘉靖三十年前後の晁氏の藏書が著錄されているものと思われる。

次に、『四庫提要』は以下のように『寶文堂書目』の得失をまとめている。

○其の著錄極めて富む。盡くは古本に屬する能わずと雖も、每書の下に間ま爲めに某刻と註明するは、亦た以て明人版本の源流を考見するに足る。特だ其の編次法無く、類目叢雜し、複見錯出する者、一ならずして足く、殊に檢閱を妨ぐ。蓋し博きを愛して未だ精なること能わざる者ならん(14)。

引用の前半部分に述べられるとおり、「宋刻」「元刻」「國初刻」あるいは「杭刻」「內府刻」といった注が見られる。また主として同一書の異なる版が著錄される場合には、「新刻」

「舊刻」という注を付している。

『寶文堂書目』は北京圖書館に唯一の抄本を所藏するのみで、まず一九二九年に趙萬里の跋を付して『國立北平圖書館月刊』第三卷第一～四、六號に翻印された。さらに一九五七年に古典文學出版社より出版された。本稿ではこの版を用いる。

2　清平山堂とその出版活動

清の丁申『武林藏書錄』の「洪氏列代藏書」には、次のような記載がある。

○(洪鐘)……。孫樾、字子美、蔭もて詹事府主簿となる。先世の遺を承け、縹緗積益す。校刊を餘事とし、既に精にして且つ多し。今に迄るまで流傳する者、路史の天祿琳瑯に見ゆるが如きは、其の校印頗る佳く、嗜古に深きを稱さる。文選は平津館鑒賞記に見え、田叔禾の序は、其の宋本を得て重刊し、校讐の精緻なること、他刻を逾え、且つ文雅稱するに足る有る者と稱す(15)。

杭州の洪氏は、南宋に洪皓（忠宣公）が鄱陽から杭州に移って以來の名門で、『夷堅志』で有名な洪邁もその家系に屬す。そして、清代に至るまで代々進士や學人を輩出し續けた。洪氏のような名門が小說の出版に關わっていたことは銘記に値する。

清平山堂が刊行した書籍のうち、話本小說以外で今日確認できるものには次のものがある。【　】に典據を以下の略號によって記す。【北】北京圖書館古籍善本書目　【內】內閣文庫漢籍分類目錄　【京】京都大學人文科學研究所漢籍目錄（以上、現藏書目）　【標】增訂四庫簡明目錄標注　【藏】藏園群書經眼錄　【明】明代版刻綜錄　【馬】馬廉「影印天一閣舊藏雨窗集欹枕集序」

○路史四十七卷　宋羅泌撰　嘉靖刊　【北、標】
○洪楩輯刊醫藥攝生類八種不分卷　嘉靖二十五年刊　【明】
　醫學權輿　壽親養老新書　食治養老方　太上玉軸氣訣
　陳虛白規中指南　霞外雜俎　逸游事宜　神光經
○新編分類夷堅志五十一卷　宋洪邁撰　葉祖榮輯　嘉靖二十五年刊　【北、內、標、藏】
○繪事指蒙　【馬】
○六臣注文選六十卷　嘉靖二十八年刊　【北、內、京、標】
○唐詩紀事八十一卷　宋計有功撰　嘉靖二十四年刊　【北、內、標、藏】
○蓉塘詩話二十卷　明姜南撰　嘉靖三十六年刊　【北、標、藏】

次に、清平山堂が刊行した小說は、以下の合計二十九篇が殘っている(16)。

○內閣文庫藏本　十五篇

○天一閣舊藏本（馬廉發見、北京大學圖書館現藏）十二篇
○阿英發見本（北京圖書館現藏）二篇

馬廉發見本には、書根に「雨窗集」「欹枕集」という題字があること、そしてそれが『四明天一閣藏書目錄』（玉簡齋叢書所收）の「雨牕集（二本）」「欹枕集（二本）」という著錄と一致することから、馬廉は天一閣舊藏本であると推定した。そして「雨窗集」「欹枕集」という題字は范氏が天一閣に所藏するときにつけた雅名だとし、清平山堂が刊行したときには總名がなかったと論じた(17)。ところがその後、顧修『彙刻書目初編』の次のような記載(18)が、戴望舒によって指摘された(19)。

○六家小說
　雨窗集十卷　長燈集十卷　隨航集十卷　歌枕集十卷
　解閒集十卷　醒夢集十卷

さらに現在では、「六家小說」は、『西湖遊覽志』（嘉惠堂本）第二卷の次の記述によって、「六十家小說」の誤りだと見なされている。

○六十家小說載有西湖三怪、時出迷惑遊人、故壓師作三塔以鎭之(20)。

以上のような經緯によって、清平山堂が刊行した小說は、一集に十篇ずつを收め、計六集六十篇からなる總集であったことが明らかになったのである。

『六十家小說』刊行の時期について、嘉靖二十年から三十年の間であろうという馬廉の推定は(21)、今日知られる清平山堂の出版活動からみても妥當である。したがって、『寶文堂書目』の著錄に、清平山堂の刊行した小說が含まれている可能性は時間的に十分ありうることだといえる。

3　『寶文堂書目』著錄と『六十家小說』の比較檢討

『寶文堂書目』には、清平山堂が刊行したと思われる書籍が著錄されている。それらを列擧すると、以下のとおりである。

卷上　史　　路史
卷上　詩詞　　唐詩紀事（杭刻）
卷中　類書　　夷堅志（杭刻）
卷中　子雜　　霞外雜俎
卷下　醫書　　壽親養老書(22)
卷下　藝譜　　繪事指蒙
卷下　佛藏　　神光經

うち二種には「杭刻」の注が付されており、杭州の洪楩清平山堂の刊本であることは間違いあるまい。「唐詩紀事（杭刻）」は、「唐詩紀事（晉府刻）」と區別されていることも參考になる(23)。他の五種については、この著錄からだけでは

清平山堂刊本であるという確證は得られないものの、例えば『路史』は時代の下る萬曆喬可傳刻本・崇禎吳弘基訂化玉齋刻本以外に明版の存在が確認されておらず、清平山堂刊本である可能性は捨てきれない。また、嘉靖二十八年刊行の『六臣注文選』と嘉靖三十六年刊行の『蓉塘詩話』が著錄されていないのは、『寶文堂書目』の著錄年代の下限がこの頃であったからだという見方もできるだろう。

ところで、『六十家小說』については、實際に集名が『寶文堂書目』に著錄されているのは、わずか一集にすぎない。

卷中　子雜　隨航集（十種）

『彙刻書目初編』は集名を載せているものの、現存の「雨窗」「欹枕」兩集は、書根に題字が記されるのみで、本文中に集名が刻されているわけではない。したがって、集名が著錄されなかったのも理解できる。

ところが、現存する內閣文庫藏の集名不明の十五篇と「欹枕集」に相當する七篇は、『寶文堂書目』ではすべて一篇ずつの篇名で著錄されているのである。『六十家小說』の現存する二十九篇の作品で著錄されていないのは、「雨窗集上」に收められたわずか五篇にすぎない。表にして示すと、以下のようになる。

『六十家小說』	『寶文堂書目』
柳耆卿詩酒翫江樓記	柳耆卿記
簡貼和尚	簡帖和尚
西湖三塔記	西湖三塔記
合同文字記	合同文字記
風月瑞仙亭	風月瑞仙亭
藍橋記	藍橋記
快嘴李翠蓮記	快嘴李翠蓮
洛陽三怪記	洛陽三怪
風月相思	風月相思
張子房慕道記	張子房慕道
陰隲積善	陰隲積善
陳巡檢梅嶺失妻記	陳巡檢梅嶺失妻
五戒禪師私紅蓮記	五戒禪師私紅蓮
刎頸鴛鴦會	刎鶏鴛鴦會
楊溫攔路虎傳	楊溫攔路虎傳
以上、內閣文庫藏本十五篇	
題缺	羊角哀鬼戰荆軻
死生交范張鷄黍	范張雞黍死生交
以上、天一閣舊藏「欹枕集上」二篇	
老馮唐直諫漢文帝	馮唐直諫漢文帝
漢李廣世號飛將軍	李廣世號將軍

夔關姚卞弔諸葛	夔關姚卞吊諸葛
雪川蕭琛貶霸王	雪川蕭琛貶霸王
李元吳江救朱蛇	李元吳江救朱蛇
以上、天一閣舊藏「欹枕集下」五篇	
題缺	梅杏爭春
題缺(24)	翡翠軒記
以上、阿英發見殘本二篇	
花燈轎蓮女成佛記	無
曹伯明錯勘贓記	無
錯認屍	無
董永遇仙傳	無
戒指兒記	無
以上、天一閣舊藏「雨窗集上」五篇	

『寶文堂書目』の著錄する題名と現存する『六十家小說』の題名とがほとんど完全に一致することは、黃永年氏がいうように、『寶文堂書目』が著錄したのは『六十家小說』にほかならないことを端的に裏付けるものだと考える。これは、例えば『醉翁談錄』の記載と『六十家小說』を比較した場合よりも、はるかに正確な一致を示している。また、「宋刻」「元刻」「國初刻」といった注が一つも付されていないことからも、『寶文堂書目』の著錄がいわゆる宋元話本の原本そのものではないという說は十分成立しうると思う。『寶文堂書目』の著錄ではしばしば「記」字が脫落しているが、これは著錄に際して生じた現象としてままあることであり、前揭の胡士瑩の說には無理があるように思う。

以上考察してきたことを總合すると、次のように結論することが妥當であろう。晁氏寶文堂は洪氏淸平山堂の刊行した書物をおおむね購入し、『寶文堂書目』に著錄した。寶文堂の藏書には『六十家小說』も含まれていたが、著錄の方針が一貫していなかったため、「隨航集」だけは集名で著錄され、そのほかはすべて各小說の篇名で著錄された。また一册に綴じられていた「雨窗集上」の五篇は何らかの理由で失われたため、『寶文堂書目』に著錄されなかった。

三　『六十家小說』の復元

『寶文堂書目』に著錄されている話本小說は『六十家小說』であるということを論證してきた以上の考察が妥當であるならば、逆に『寶文堂書目』を利用して、『六十家小說』のすでに失われた篇を復元することが可能になる。

1　熊龍峯刊行の小說

萬曆間に熊龍峯の忠正堂が刊行した小說は、四篇が內閣文庫に現存している(25)。そのうちの一篇「馮伯玉風月相思」

は、『六十家小説』に現存する「風月相思」と重複している。両者を比較對照してみると、わずかな文字の異同を除いて完全に一致する。他の三篇については、現存する『六十家小説』の中には見あたらないものの、『寶文堂書目』にはいずれも該當する作品が著錄されている。こうした事實から、熊龍峯刊行の小説は、『六十家小説』に基づいて刊刻したと推定することが可能だと思う。

したがって、『寶文堂書目』に著錄されており、熊龍峯の刊本が現存する三篇を、『六十家小説』の佚本として復元することができる。

『寶文堂書目』	『六十家小説』	熊龍峯刊本
孔淑芳記	佚	孔淑芳雙魚扇墜傳
風月相思	風月相思	馮伯玉風月相思小説
失記章臺柳	佚	蘇長公章臺柳傳
彩鸞燈記(26)	佚	張生彩鸞燈傳

2　『寶文堂書目』著錄と「三言」

次に、『六十家小説』がどのように「三言」に受け繼がれているかを表にまとめてみる。

a　「三言」に受け繼がれたもの

『寶文堂書目』	『六十家小説』	「三言」
柳耆卿記	柳耆卿詩酒翫江樓記	古12
簡帖和尚	簡貼和尚	古35
風月瑞仙亭	風月瑞仙亭	警6入話
陳巡檢梅嶺失妻	陳巡檢梅嶺失妻記	古20
五戒禪師私紅蓮	五戒禪師私紅蓮記	古30
刎鶏鴛鴦會	刎頸鴛鴦會	警38
羊角哀鬼戰荆軻	題缺	古7
范張雞黍死生交	死生交范張鷄黍	古16
李元吳江救朱蛇	李元吳江救朱蛇	古34
無	錯認屍	警33
無	戒指兒記	古4
彩鸞燈記	佚	古23

b　「三言」に受け繼がれなかったもの

『寶文堂書目』	『六十家小説』
西湖三塔記	西湖三塔記
合同文字記	合同文字記
藍橋記	藍橋記
快嘴李翠蓮	快嘴李翠蓮記
洛陽三怪	洛陽三怪記
風月相思	風月相思
張子房慕道	張子房慕道記

陰隲積善	陰隲積善
楊溫攔路虎傳	楊溫攔路虎傳
馮唐直諫漢文帝	老馮唐直諫漢文帝
李廣世號將軍	漢李廣世號飛將軍
夔關姚卞吊諸葛	夔關姚卞弔諸葛
雪川蕭琛貶霸王	雪川蕭琛貶霸王
梅杏爭春	題缺
翡翠軒記	題缺
無	花燈轎蓮女成佛記
無	曹伯明錯勘贓記
無	董永遇仙傳
孔淑芳記	佚
失記章臺柳	佚

他方、「三言」の中には、現存する『六十家小說』には收錄されていないが、『寶文堂書目』に見える題名と物語內容が一致する作品のあることが、すでに譚正璧によって指摘されている(27)。それを以下にまとめる。

c　『寶文堂書目』著錄と「三言」の一致するもの

『寶文堂書目』	「三言」
種瓜張老	張古老種瓜聚文女（古33）
錯斬崔寧	十五貫戲言成巧禍（醒33）
山亭兒	萬秀娘仇報山亭兒（警37）
小金錢記	小夫人金錢贈年少（警16）
玉觀音	崔待詔生死寃家（警8）
燕山逢故人鄭意娘傳	楊思溫燕山逢故人（古24）
齊晏子二桃殺三學士	晏平仲二桃殺三士（古25）
沈烏兒畫眉記	沈小官一鳥害七命（古26）
任珪五顆頭記	任孝子烈性爲神（古38）
趙正侯興	宋四公大鬧禁魂張（古36）
趙旭遇仁宗傳	趙伯昇茶肆遇仁宗（古11）
史弘肇傳	史弘肇龍虎君臣會（古15）
金鰻記	計押番金鰻產禍（警20）
宿香亭記	宿香亭張浩遇鶯鶯（警29）
勘靴兒	勘皮靴單證二郎神（醒13）
合色鞋兒	陸五漢硬留合色鞋（醒16）
紅白蜘蛛記	鄭節使立功神臂弓（醒31）

『六十家小說』の復元に際して重要なのは、このうちc表である。すでに失われた『六十家小說』の一部で、「三言」に收錄されたものが、この中に含まれて現存している可能性がある。

特に、以下の三篇は、「三言」の篇名の下に『寶文堂書目』と一致する題注があり、「三言」は現在は失われた『六十家小說』に依據している可能性が強い。

『寶文堂書目』	「三言」
錯斬崔寧	十五貫戲言成巧禍（宋本作錯斬崔寧）
玉觀音	崔待詔生死寃家（宋人小說(28)題作碾玉觀音）
金鰻記	計押番金鰻產禍（舊名金鰻記）

3 『也是園書目』および『述古堂書目』著錄の小說

次に、通俗小說を比較的多く著錄している、清初錢曾の藏書目錄を檢討する。まず『也是園藏書目』(29)卷十には、「宋人詞話」(30)の項に十二篇の小說の篇名が著錄されている。

『也是園書目』	『寶文堂書目』	『六十家小說』
燈花婆婆	燈花婆婆	
種瓜張老	種瓜張老	
紫羅蓋頭	紫羅蓋頭	
女報寃	女報寃	
風吹轎兒	風吹轎兒	
錯斬崔寧	錯斬崔寧	
小亭兒	山亭兒	
西湖三塔	西湖三塔記	西湖三塔記
馮玉梅團圓	馮玉梅記	
簡帖和尙	簡帖和尙	簡貼和尙
李煥生五陣雨	李煥生五陣雨記	

また、孫楷第『中國通俗小說書目』卷一宋元部は、錢曾『述古堂書目』の著錄を利用している。それによれば、抄本の『述古堂書目』(31)には、『也是園書目』著錄の十二篇に加えて、さらに次の著錄があるという。

『述古堂書目』	『寶文堂書目』	『六十家小說』
柳耆卿翫江樓記	柳耆卿記	柳耆卿詩酒翫江樓記
合同文字記	合同文字記	合同文字記
風月瑞仙亭	風月瑞仙亭	風月瑞仙亭
朱希眞春閨	朱希眞春閨有感	
蕭回覓水記	蕭回覓水記	

『也是園書目』および抄本『述古堂書目』に著錄された十七篇の小說が、ほぼ完全に『寶文堂書目』の著錄と一致することは、兩者の記載が共通のテクストによっていることを强く示唆している。そして、『寶文堂書目』は『六十家小說』を著錄しているという前章の考察に基づけば、その共通のテクストが『六十家小說』である可能性はかなり高いと思う。特にうち五篇が現存の『六十家小說』と一致することは、以上の假定の妥當性を示唆する。したがって、殘る十二篇は、『六十家小說』の現在失われた部分に收められていたと考え

られるのである。

このように、錢曾の書目に著錄される十七篇が『六十家小說』であったとすれば、先の三十二篇に加えて、新たに十二篇が明らかになったことになる。また、先に『六十家小說』の佚本が含まれている可能性を指摘したc表から、「種瓜張老」「錯斬崔寧」「山亭兒」「小金錢記」の四篇をそれと認めることができる。

4　『六十家小說』の復元

これまでの考察によって、現存する『六十家小說』二十九篇（うち『寶文堂書目』に著錄されたもの二十四篇、著錄から漏れた「雨窗集上」五篇）に、熊龍峯刊行の四篇を加えることによって（うち重複一篇）、まず『六十家小說』の三十二篇が明らかになった。すなわち前掲a表およびb表の合計三十二篇である。ついで、「三言」の題注が『寶文堂書目』と一致する三篇、および『也是園書目』『述古堂書目』著錄の十二篇を新たに『六十家小說』所收のものと推定することによって（うち重複一篇）、最終的に四十六篇を明らかにした。このうち三十九篇までは熊龍峯刊本や「三言」などで補うことによって內容を知ることができ、內容を窺い知ることのできない完全な佚本は七篇にすぎない。

殘る十四篇のうち、「隨航集」として一括して著錄された十篇の篇名は、『寶文堂書目』からは知るすべがない。したがって、『寶文堂書目』の著錄に含まれている可能性を持ち、まだ『六十家小說』であることが特定されていないものは、四篇だと考えられる。あるいは、「雨窗集上」と同樣に、「雨窗集下」所收の各篇も『寶文堂書目』に著錄されなかったとすれば、殘る四篇のうち「雨窗集下」所收のものは『寶文堂書目』の中に見いだすことはできない。

これら最後の四篇のうち、のち「三言」に採られたものは、前掲c表の中に含まれているはずである。一方、「三言」に採られなかったものについては、譚正璧が「丙　存佚和內容都不可考的」の項に題名だけを列擧している(32)が、その中のどれが『六十家小說』であるかを特定することは全く不可能である。

このように、目錄學上の操作によって復元できる『六十家小說』は、以上を限度とせざるを得ない。その結果をまとめれば、次のようになる。

『寶文堂書目』	『六十家小說』	その他
無	花燈轎蓮女成佛記	
無	曹伯明錯勘贓記	
無	錯認屍	警33
無	董永遇仙傳	

無	戒指兒記	古4
以上、天一閣舊藏「雨窗集上」		
?		
?		
?		
?		
?		
以上、「雨窗集下」(佚)		
羊角哀鬼戰荆軻	題缺	古7
范張雞黍死生交	死生交范張鷄黍	古16
?		
?		
?		
以上、天一閣舊藏「欹枕集上」(殘)		
馮唐直諫漢文帝	老馮唐直諫漢文帝	
李廣世號將軍	漢李廣世號飛將軍	
夔關姚卞吊諸葛	夔關姚卞弔諸葛	
雪川蕭琛貶霸王	雪川蕭琛貶霸王	
李元吳江救朱蛇	李元吳江救朱蛇	古34
以上、天一閣舊藏「欹枕集下」		
無	?	

無	?	
無	?	
無	?	
無	?	
無	?	
無	?	
無	?	
無	?	
無	?	
無	?	
以上、「隨航集」(佚)		
柳耆卿記	柳耆卿詩酒翫江樓記	古12
簡帖和尚	簡貼和尚	
西湖三塔記	西湖三塔記	古35
合同文字記	合同文字記	
風月瑞仙亭	風月瑞仙亭	警6入話
以上、內閣文庫藏第一册		
藍橋記	藍橋記	
快嘴李翠蓮	快嘴李翠蓮記	
洛陽三怪	洛陽三怪記	熊
風月相思	風月相思	
張子房慕道	張子房慕道記	
以上、內閣文庫藏第二册		

陰隲積善	陰隲積善	古20	
陳巡檢梅嶺失妻	陳巡檢梅嶺失妻記	古30	
五戒禪師私紅蓮	五戒禪師私紅蓮記	警38	
刎鴛鴦鴛會	刎頸鴛鴦會		
楊溫攔路虎傳	楊溫攔路虎傳		
以上、内閣文庫藏第三册			
梅杏爭春	題缺		
翡翠軒記	題缺		
以上、阿英發見殘本			
彩鸞燈記	佚	熊	古23
孔淑芳記	佚	熊	
失記章臺柳	佚	熊	
錯斬崔寧	佚	醒33	
玉觀音	佚	警8	
金鰻記	佚	警20	
燈花婆婆	佚	古33	
種瓜張老	佚	平妖傳第一回	
山亭兒	佚	警37	
馮玉梅記	佚		
小金錢記	佚	警16	
紫羅蓋頭	佚		
女報寃	佚		
風吹轎兒	佚		
李煥生五陣雨記	佚		
朱希眞春閨有感	佚		
蕭同覓水記	佚		
以上、佚本			

（存・殘本二十九篇、佚本十七篇）

おわりに

本稿の結論を要約すれば次のとおりである。『寶文堂書目』著錄の小說名と『六十家小說』の篇名とがほぼ完全に一致すること、清平山堂刊行の他の書籍が『寶文堂書目』に著錄されていること、の二點を主な根據として、『寶文堂書目』著錄の小說はいわゆる宋元話本そのものではなく、清平山堂の『六十家小說』であるという馬廉らの說を目錄學的に證明した。そこからさらに一歩を進めて、『六十家小說』の復元を試み、現存の二十九篇に加えて、熊龍峯刊行の三篇、「三言」の題注と『寶文堂書目』著錄の一致する三篇、『也是園書目』および『述古堂書目』著錄の十一篇を、『六十家小說』の一部であったと推定した。

以上の結論は、『寶文堂書目』の見直しを迫るだけでなく、宋代にすでに話本が存在したという考え方にも疑問を呈するものとなるであろう。元刻の話本と見なされているものに

は、『全相平話五種』『五代史平話』『大唐三藏取經詩話』『大唐三藏取經記』『新編紅白蜘蛛小說』（殘一頁）がある。しかし、その文章表現は文言から白話への過渡的段階というべきもので、明末の白話小說にみられる文體とは相當の隔たりがある。明代に白話による書記表現が進歩するにしたがって、話本小說も文學樣式として成立したと考えるべきだと思う。しかも嘉靖刊行の『六十家小說』においてさえ、なお文言を含む樣々な文體の作品が混在しており、話本小說の樣式は確立の過程にあると考えられる。

話本小說がテクストとしての表現樣式を獲得するまでの過程を、まず文學や語學の立場から獨自に研究し、そのうえで實際の講談に關する歷史的研究などとあわせ考えることによって、はじめて講談と話本小說との關係は明らかにすることができると思う。話本小說をただちに實際の講談であるかのように考えるのは、文學テクストの成立に對してあまりにもナイーブなように思われる。

注

（1）譚正璧『三言兩拍資料』（上海古籍出版社、一九八〇）、小川陽一『三言二拍本事論考集成』（新典社、一九八一）など。

（2）「中國小說史略」第十二篇宋之話本（『魯迅全集第九卷』人民文學出版社、一九八一、一一二頁）。初出は一九二三年。清平山堂『六十家小說』をめぐって（中里見）

なお翻譯は、今村與志雄譯「中國小說史略」（『魯迅全集11』學習研究社、一九八六）二〇四頁による。

（3）増田渉「「話本」ということについて――通說（あるいは定說）への疑問――」（『人文研究』十六・五、一九六五）

（4）「宋元話本存佚綜考」（『話本與古劇』上海古典文學出版社、一九五六）六頁。

（5）『中國通俗小說書目』（人民文學出版社、一九八二）卷一宋元部。初版は一九三二年（未見）。

（6）『話本小說概論』（中華書局、一九八〇）二六九頁以下。

（7）「寶文堂書目所錄宋元明人話本考」（『話本與古劇』所收）

（8）『話本小說概論』四九五頁。

（9）馬廉「影印天一閣舊藏雨窗集欹枕集序」。譚正璧校點『清平山堂話本』（上海古籍出版社、一九八七）に附錄されたものによる。初出は一九三四年。

（10）陳汝衡『說書史話』（作家出版社、一九五八）六〇頁。本書は一九三六年の『說書小史』（未見）を增補したもの。

（11）「記元刻《新編紅白蜘蛛小說》殘頁」（『中華文史論叢』一九八二・一）一〇九～一一〇頁、注七。

（12）黃虞稷『千頃堂書目』（上海古籍出版社、一九九〇）。晁瑮父子については、ほかに葉昌熾『藏書紀事詩』（古典文學出版社、一九五八）卷三も參照。

（13）杜信孚纂輯、周光培・蔣孝達參校『明代版刻綜錄』（江蘇廣陵古籍刻印社、一九八三）

（14）『四庫全書總目提要』（中華書局、一九八七、據浙江杭州本影印）卷八十七。

(15) 丁申『武林藏書錄』(古典文學出版社、一九五七) 卷中、四四頁。

(16) 現在流布している影印本は、『清平山堂話本』(文學古籍刊行社、一九八七)。しかし、譚正璧校點本の凡例一に指摘があるように、修改が施されている。佐藤晴彦「互いに補い合う《清平山堂話本》の排印本と影印本」(『東方』九六、一九八九・三) 參照。阿英發見本のうち、一種は阿英「記嘉靖本翡翠軒及梅杏爭春」(譚正璧校點本附錄、『小說閒談』原載) に、もう一種は阿部泰記「『翡翠軒』殘本考」(『中國文學論集』十四、一九八五) に載錄されている。

(17) 馬廉「影印天一閣舊藏雨窗集欹枕集序」

(18) 嘉慶四年序刊本 (東北大學圖書館藏) による。光緒十二年上海福瀛書局據仁和朱氏增訂本には、「六家小說」を載せていない。

(19) 戴望舒「跋雨窗欹枕集」(『小說戲曲論集』作家出版社、一九五八) 五七頁。

(20) 田汝成『西湖遊覽志』(上海古籍出版社、一九八〇) 校勘記、三〇九頁。

(21) 馬廉「清平山堂話本序目」(譚正璧校點『清平山堂話本』附錄)

(22) 一九九〇年に上海古籍出版社から影印された『壽親養老新書』(據清同治九年刊本) によれば、その卷三は「太上玉軸六字氣訣」となっており、また卷二は篇名はないもののその內容は「食治養老方」と一致すると思われる。清平山堂刊本が同治刊本と同樣の構成であるとすれば、『壽親養老新書』という著錄は、「壽親養老新書」「食治養老方」「太上玉軸氣訣」の三種を含むものと考えることができる。

(23) 『唐詩紀事』には嘉靖二十四年張子立刊本、『夷堅志』には嘉靖十五年葉邦榮刊本もある。しかし張子立は山東黃縣の人、葉邦榮は福建閩縣の人で、官歷から見ても、杭州で出版した可能性は低い。

(24) 阿部泰記「『翡翠軒』殘本考」によれば、版心にそれぞれ「梅杏爭春」「翡翠軒」とあるという。

(25) 孫楷第『日本東京所見小說書目』(人民文學出版社、一九五八) 七頁。

(26) 一二九頁と一三七頁に複出する。一つは「綵鸞燈記」に作る。

(27) 「寶文堂書目所錄宋元明人話本考」の「甲　現在尙存的」の項。譚正璧は「范鰍兒雙鏡重圓」(警12) を「馮玉梅記」と見なしている。しかし、女主人公の名前は『警世通言』では呂順哥に作っており、馮玉梅に作るのは繆荃孫『京本通俗小說』の改竄である。したがって、これを削除した。

(28) 話本小說が宋に由來するものと考えられていたことは、例えば『古今小說』や『拍案驚奇』の序文にも見える。したがって、「宋本」「宋人小說」という注記は必ずしも宋本そのものを指すものではなく、話本一般、あるいは「宋本」に基づいた『六十家小說』を指すものと解することができる。

(29) 玉簡齋叢書所收。

(30) 「宋人詞話」が文字通り宋本を意味するとは限らないことは、注28および Patrick Hanan, *The Chinese Short Story :*

Studies in Dating, Authorship, and Composition, Harvard University Press, 1973 の七頁を參照。

(31) 通行の粤雅堂叢書所收の四卷本には、通俗小說は全く著錄されていない。孫楷第が見た十卷の錢曾稿本は、現在北京圖書館所藏の抄本である。『北京圖書館古籍善本書目』一一二六頁參照。

(32) 「寶文堂書目所錄宋元明人話本考」

既刊案內

Books and Articles on Oriental Subjects Published in Japan during 1990, Vol. 37

（1990年東方學關係著書論文目錄　第37册）

A 5 判，總頁456，頒價4,700，會員1割引

○本册は1990年中に刊行・發表された著書552件および論文3,018件を採錄した英文文獻目錄で，卷末に採錄雜誌・發行所一覽894件，執筆者（團體を含む）索引3,044件を附載した。著書は著者名表記アルファベット順に配列し，論文は地域別に分類，配列は著書同樣に著者名表記アルファベット順にした。ただし，中國は前近代史，近現代史，文學・言語，思想・哲學・宗教，美術・考古，その他の項目に分類した。また印度哲學・佛教學についても各地域より獨立させ別途項目をたてた。

○編集委員：池田雄一，石澤良昭，梅村　坦，江島惠教，大井　剛，大島　晃，大塚秀高，木村清孝，近藤一成，清水宏祐，中嶋幹起，本庄比佐子，山崎元一

1956年	第3册	——1957年	第4册	各	900	（頒價）
1958年	第5册	——1965年	第12册	各	2,100	〃
1966年	第13册	——1978年	第25册	各	3,600	〃
1979年	第26册	——1980年	第27册	各	4,000	〃
1981年	第28册	——1990年	第37册	各	4,700	〃

東　方　學　第八十五輯　抜刷

平成五年一月三十一日　發行

發行所　財團法人　東　方　學　會
東京都千代田區西神田二―四―一